

霊長類研究所における飼育動態

「新しいサル像をめざして」(2002)

京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター 編

後藤俊二

飼育形態がコラル、ハーレム、個別形式と様々であり、また多くの個体が実験に供されるため、個体の移動機会の多いことが当研究所の特徴であるが、1969年以来、研究所の附属施設として、飼育下の実験・観察用個体の管理業務をセンター(1999年までサル施設と呼称)が担ってきた。サル導入開始以来これまでの個体数動態について図1～3に示した。

図1 サル飼育総頭数推移('69~'99)

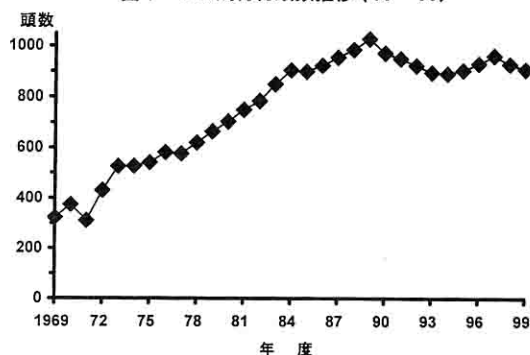
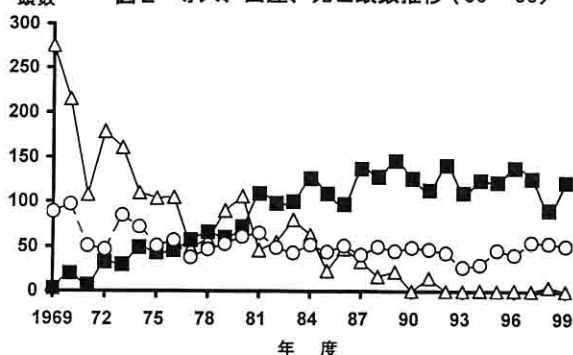
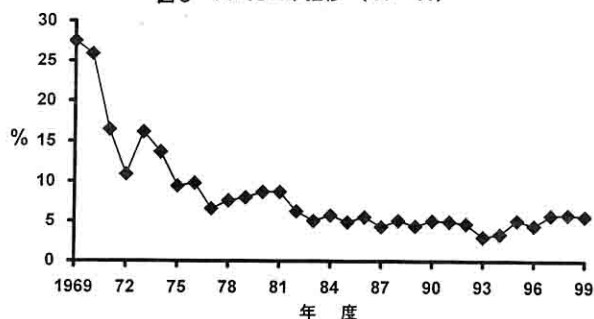


図2 導入、出産、死亡頭数推移('69~'99)



—△— 導入 —■— 出産 —○— 死亡

図3 サル死亡率推移('69~'99)



当然のことながら、設立当初は殆どの個体が所外から導入され、また死亡数も少なくなかった。当時はサル類の飼育管理技術の確立途上であったこと、また導入される個体の殆どが野生由来のものであるため、捕獲から輸送にいたる過程での様々なトラブルや病原体の相互感染により、導入された多くの個体は何らかの健康上の問題を抱えていたことは想像に難くない。このことは諸外国においても同様であり、野生動物保護と実験動物学上の国際的な問題であったと言えよう。

一方当研究所では早くから、飼育個体の使用と管理方針について協議するサル委員会が設立され、これらの問題を改善すべく、センターと共同して使用する個体をすべて飼育下で生産し健康に管理することを目標に、様々な努力が払われてきた。1977年度の飼育総数は約600頭で

あるが、この年度より出産頭数が死亡数を上回るようになった事がわかる。所外からの導入数は設立当初より減少し続け、92年度からは所外からの依頼による緊急避難的な導入が2例あった以外は新たな導入は無くなっている。

現在では飼育総頭数は800頭を上回るが、総飼育頭数に対する死亡率は5%台に留まっている。かつて頻発していた重篤な創傷感染や急性の全身疾患はごく少なくなった。また、止む無く実験殺される個体の内臓を観察してみても、殆どの個体に、問題になるような大きな病巣は見られなくなり、ユーザーにはおおむね健康な個体が提供されていることが判る。このことは飼育環境・技術や健康管理法の向上の成果であり、設立当初からの飼育管理上の基礎的な目標はほぼ達成されつつあると考えられる。

現在センターは新たなステップとして、飼育コロニーのSPF化を進めているが、依然として未だ不明な部分の多い、飼育下とはいえいわば野生動物の資質を備えているサル類とヒトとの相互接触による病原体の共通感染の潜在リスクは今後も変わることなく、スタッフや来所者と飼育サル類の健康管理面の強化が望まれる。また、長期飼育における慢性疾患等のコントロールや飼育下個体の精神的 welfare 面での更なる改善を推し進める事が今後とも重要な課題であろう。

(ごとう しゅんじ、 京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター)



大好きな蜂蜜をペロペロ、ゴンおじさん